

仙台経済同友会報

Sendai Association of Corporate Executives News



色づいた広瀬通の銀杏並木

10・11

2016 No.381



目 次

■ IPPO IPPO NIPPON プロジェクト 東北支援閉会式典	1
■ 平成28年10月例会講演要旨	3
「知的機動力を錬磨する ―暗黙知・場・実践知―」 講師：一橋大学名誉教授 野中 郁次郎氏	
■ 委員会報告	8
産業競争力強化委員会 DMM.make.AKIBA視察	
■ 9・10月幹事会・全セミ準備委員会報告	9
■ 会員異動	10
■ 仙台経済同友会9・10月活動日誌	11
■ 今後の予定	12



速報

IPPO IPPO NIPPON 東北支援 一区切り
5年10期 支援総額21億7,895万円

2011年3月11日の東日本大震災で、甚大な被害に見舞われた岩手、宮城、福島各県の人材育成、復興創生を支援してきた「IPPO IPPO NIPPON プロジェクト」の東北支援終了式典が、11月6日、仙台市のウェスティンホテル仙台で開催された。式典には全国から経済同友会関係者のほか、3県の教育関係者ら140人が出席。パネルディスカッションでは、3県の教育長らが支援の成果などについて報告した。楽器の支援を受けた岩手県立高田高校の吹奏楽部もステージに登壇し、演奏を披露した。閉会に合わせて、小林喜光共同委員長（経済同友会代表幹事）が「東北に続き熊本支援を始めた。これまでの経験を活かして取り組む」と述べた。

同プロジェクトは、経済同友会が全国の加盟同友会に呼びかけ、大震災発生後の同年7月に運営委員会を設立。今年9月まで5年10期にわたり496企業・法人、71個人から総額21億7,895万円が復興支援のために寄付された。保護者を亡くした子供らへの支援のほか、地場産業の将来を担う若者を育てる職業高校、新規事業創造をもたらす研究

開発を担う大学などで活用する最新の実用機材が贈られた。

開会に際して、同プロジェクトの種村均共同委員長（中部経済同友会代表幹事）があいさつ。「支援は学生らの励ましになったと思う。こうした助け合いの精神は、日本人の尊い心として、受け継がれていくと信じる」と、設備・機材ばかり



パネルディスカッションでは、岩手、宮城、福島教育現場にもたらした、プロジェクトの成果が報告された。



支援先の岩手県立高田高校吹奏楽部の生徒らが、感謝の心をこめて演奏を披露した

でなく心と心のつながりの点でも大きな成果をもたらしたことを強調した。

引き続き行われたパネルディスカッションでは、高橋嘉行岩手県教育長、高橋仁宮城県教育長、大沼博文福島県教育次長が、それぞれこれまでの歩みを報告。単なる「復旧」ではなく支援によって最新の機材が使えるようになったことから、被災前にも増して、生徒や学生の技術習得意欲や就職率の向上に大いに役立っているエピソードを交えながら、5年間のプロジェクトが果たした役割と成果の大きさに謝意を述べた。

3県への支援総額はそれぞれ岩手7億1,338万円、宮城7億6,145万円、福島7億409万円。

主な内容は、岩手は高田高をはじめとする職業専門高10校への実習機材提供などに5億7,093万円、岩手大三陸復興推進機構の活動資金に1億1,088万円、県の「いわての学び希望基金」への寄付が3,156万円。

宮城は県農業高、県水産高、気仙沼向洋高など職業専門高15校に5億9,655万円、東北大の沿岸部事業と宮城南三陸復興ステーションの活動資金に1億2,911万円、県の「みやぎこども育英募金」

に3,578万円。

福島はいずれも県立のいわき海星高、磐城農業高、原発事故に伴い避難した小高工業高など21校に6億6,387万円、福島大OECD東北スクール活動資金に1,000万円、県の「ふくしまこども寄附金」に2,022万円。

プロジェクトの意義は、震災後現場が必要なものを迅速に、課題に対してきめ細かく対応したことにある。国の補助金対象が「原形復旧」であり台帳記載の備品が原則とされる中、現実的な最新機材が提供できた。

その結果、支援を受けた各校生徒らが意欲的に取り組み、資格取得、地元就職・進学が震災前水準を上回っている現状が、パネルディスカッションで紹介された。

また支援は今後、4月14日以降の熊本地震により実習機材に被害を受けた現地専門高校に対し、新たに実施することを紹介。東北から熊本へと支援を広げることを受け、高田高の吹奏楽部の演奏に続き、熊本県立熊本工業高吹奏楽部が、全日本マーチングコンテストで昨年まで4年連続通算11回の金賞を獲得している演奏を披露した。

平成28年10月例会 講演要旨

知的機動力を錬磨する — 暗黙知・場・実践知 —

一橋大学名誉教授 野中 郁次郎 氏



平成28年10月例会が10月14日、仙台勝山館で開かれた。講師に『全員経営』『失敗の本質』などの著書で知られ「知的創造経営理論」を提唱する一橋大学名誉教授の野中郁次郎氏を迎え、東洋的経営について講演していただいた。自らの経験や知を語り合う場を持ち、それぞれが共有することで新しい知につながり、それが繰り返し相互に作用していくことを、経営学の観点からユーモアを交えて分かりやすく紹介された。

マネジメント理論の変遷

知識創造理論とは何か、そして、どのようにして実践するのかについてお話したい。

「人類は叡智を極め続けている」「嘗々と暗黙知と形式知を変換し続けて人類は進歩してきた」一。これは、生物物理学の権威である和田昭允東京大学名誉教授の言葉である。ピーター・ドラッカーも、「21世紀、唯一の重要な資源はナレッジ（Knowledge）である」と述べ、知識社会を予言し、イノベーションの重要性を説いた。規模の経済、コスト効率、株主価値の最適化というものがグローバル競争においてはもはや重視されず、市場のオープン化が進む時代にあって、まさにイノベーションこそが地域経済を含め、今後の大きな戦略の中心であり、知識こそが鍵となる資源である。

このように知識が競争優位の源泉となる時代においては、いかに知識が富を生み出すのか、その創造過程を説明する理論が必要になる。問題はいかに機動的に知識を生み出していくのか、ということになる。つまり、変化の只中で、この知的機動力（知識を機動的に生み出す力）を基に、共通

善に向かい、頭と体をフル活用し、絶えず暗黙知と形式知を往還させていく、さらにそのプロセスを俊敏かつタイムリーに持続し続けていくダイナミックな能力が極めて重要になるということである。

これまでのマネジメント理論は、演繹的に分析し判断する傾向にあり、極めてサイエンス思考、まさに数値化が主流だった。その源泉は哲学にある。有名な『アテネの学堂』というラファエロの絵画作品には、当時のギリシャの哲学者や科学者たちが描かれている。画面中央には今日の哲学の源流となっている二人の知の巨人が位置し、左側はプラトン、右側は弟子のアリストテレスである。プラトンは天を指差しているが、これは真善美を求め、限りなく神に近づくことを意味するポーズである。神の万能性を示唆するアイデアリズムを象徴していると言える。一方、弟子のアリストテレスは、真善美は地上にこそあるとばかりに、地面を指差す。これはリアリズムの考え方をあらわしている。数学的なプラトンは「演繹の父」、対して現実から普遍化するアリストテレスは「帰納の父」といわれている。

さらに、これまでの基本的な西洋の知の伝統は、身体性を否定する考え方も非常に強かった。五感などは主観であり、普遍に近づけないとされてきた。身体性に関わるすべてをそぎ落とし純化して、純粹に理性だけで真善美に近づくべきである、と考えられてきた。つまり、頭と体を分ける心身二元論である。先に紹介したプラトンの考えのように、全てのものがアイデアにあり、真理は目に見えるものには無い、という思想が主流を占めてきたのだ。

科学の源泉は直接経験の積み重ね

客観性をもってアイデアを追求する科学は、人間の直接経験を全て抽象化してしまっている。しかし、主観的に物を見て、自分が感じている直接経験こそが科学の根本ではないか。自分が感じている直接経験が、頭で抽象化する以前の真の姿であり、外部からの物理的刺激的により知覚されていくものである。科学はアウトサイド・インの発想で第三人称だが、重要なことはインサイド・アウト、主観を起点とすることだ。主観という感覚質を大切にしながら普遍を追求していくことを主張したのが哲学者フッサールである。彼は、客観的に確定された、知り得るものだけを真理と認めるとするなら、我々が現実には直観する生き生きとした人間の存在をどのように説明するのか、と問題提起し、全ての科学は我々の経験が源泉となるという考え方を主張した。そういう意味でフッサールは、日常生活全てが数理化・分析化している現代を批判したのである。

今日、ICTやAIに注目が集まり、あらゆる分野において客観的な知識こそが真の知識であるという、フッサールが警鐘を鳴らした現象が起きている。しかし、知をつくるという本質は主観から始まり、現実を直観していくことにある。とりあえ

ず客観的分析は括弧に入れ、ありのままの生き生きとした現実を感覚で感じるのだ。そこから経験の意味の本質を追究していく。本質直観というものは単なる現場主義の直観ではない。現場の中で五感を使い、全身で直観したものを大切にしながら、どのようにすれば真理に向かって進んでいけるのかを真摯に追求し、それぞれ違った主観を持ちながらも大いに議論し、共通の主観をつくりあげていく共同体験をするべきである。そうした過程を経て新しい意味や価値、コンセプト等を紡いでゆくことが望ましい。こうした考え方が知識創造理論であり、その根底にあるものが暗黙知である。

AIやIoT、ディープラーニング等が流行している一方で、身体性の重要性に関しても科学的な発見が次々と現れてきている。身体感覚は人と人を結びつける根本である。今までは理性が中心だったが、頭と体を分けずに、それぞれが相互作用しながら知をつくっていく、身体化された心、という考え方が台頭しており、心は脳と身体と環境、この相互作用によって生まれてくるという考えが実証されつつある。

アートとサイエンスをバランスさせる

最近、翻訳された『GRIT（グリット）』という著作には「重要なものはやり抜く力（根性）だ」と記されている。成功失敗を問わず、子どもの成長に関する様々な事例を丁寧に検証した結果、わかったことだ。これまではIQ至上主義だったが、どうもそうではないらしい。中長期にわたる調査結果によると、一番大事なことはやりぬく力、根性である。二番目は自制心、さらに社会的知性、感謝の気持ち、楽観主義、好奇心である、と判明したという。これらは、ノンコグニティブスキル（Non Cognitive Skill）と呼ばれており、人の成長に大きな影響を及ぼす。

マネジメントはアートなのか、サイエンスなのかという議論がある。これについて『MBAが会社を滅ぼす』という本を出版したヘンリ・ミンツバーグは、マネジメントに重要なのは、クラフツ（経験）、次にデザインまたはアート、さらにサイエンスであるという論旨を展開している。つまり、クラフト、アート、サイエンスのブレンドがマネジメントであり、これらをバランスさせられる献身的な人材こそが重要であるというのが彼のマネジメント理論だ。マネジャーは具体的に变化する状況の中で、一貫したビジョンや信念に基づき、組織、システムを分析するだけではなく、それを総合しなければならない。分析した結果を総合し、そこから新しいコンセプト、価値、知識を生み出さなければならないと記されている。我々はこの考えに共感している。知識とは我々の全人的な思いを真善美に向かって正当化していくプロセス、まさにイノベーションそのものなのであり、その特質は人間の関係性の中で主体的に、普遍性を求めていくことである。それゆえ、知識の本質は人そのものに他ならないのである。

暗黙知というコンセプトを最初に提唱したのは、ノーベル賞候補のマイケル・ポラニーという科学者である。彼は「全ての知識は暗黙知に根ざしており、全ての経験知、身体知を語ることはできない。しかし、思いがなければ知を作ることとはできない」、と言っている。知の創造過程において、信念という主観と理性という客観、アートとサイエンス、そのバランスを取ることが重要になるのである。では、その主観を客観化する方法とはなにか。それは絶えず品位と美意識をもち、人に対峙し、共同体験し、無限のエクセレンスを追求する職人の姿勢、経験知の引き出しを豊富にもつ職人道にあると考える。なぜなら、職人は部分と全体を目的に応じ

て行き来し、ダイナミックに体と頭を使って考えることができる。それこそまさに暗黙知といえるのである。

個から全体へと知を組織的に培う

知識創造理論は、ある意味で日本的である。西洋の心身二元論とは異なり、我々は頭と体は一体であると考ええる。西田幾多郎の哲学をはじめ、日本の立派な知識、カルチャーとも通底しているが、知識創造とは暗黙知と形式知の相互作用のスパイラルである。このスパイラルは、まず、直接経験を通じた直観の共有化（Socialization）から始まる。次にその直観を徹底的に対話して言葉、コンセプトにする。これは表出化（Externalization）である。さらに、その表出されたものを分析（サイエンス）しモデル化、物語化する。これは連結化（Combination）である。そして、それを徹底的に実践する。これは内面化（Internalization）である。このプロセスの繰り返し、スパイラルの継続が、イノベーションモデルになる。これら4つのプロセスの英語訳の頭文字をとってSECIモデルとして知られるようになった。

元々は個人の思いだったものが対話を通じてチームとしてひとつの知となる。その知をチームとチームでつなげて組織知を培う。このように組織的に形式知化された知を実践し続けることで暗黙知が蓄積され、次につながっていく。こうした無限のスパイラルを組織が継続できるかどうか、肝である。個人、チーム、組織、そして社会全体が一体となることが知識社会のあるべきマネジメントである。実は、この考えは日本で発生したものである。我々はそうした文化を既にもっている。それを普遍化したいのである。

相互主観が「場」になる

次は「場」の重要性について述べたい。一人ひとりの主観は当然ぶつかり合うが、それを正当化しなければ真理に近づかない。バラバラな主観を一つにする「場」、相互の主観性を共有し組織化する「場」が必要になってくる。お互いが全人的に向き合い、受け入れあい、共感しあう時に、その「場」を成立させることができるのである。それはある意味で無私というか、自我を超えた「我々」としてのまとまりの主観として成立させることが重要なのだ。それを可能にするものは何か。フッサールの現象学によると、そもそも我々は相互主観性を育むDNAをもっている。母親と乳幼児の関係のように、生き生きとした現在が主客未分の状態で共有化するDNAを現在も持続的に有している。この関係はマルチン・ブーバーの言葉では「我-汝 (I-Thou) 」の関係である。私たちは、感性の相互作用を無意識のうちにやってきたのである。

成長につれエゴが成立し、主客が分離され、「我-汝 (I-Thou) 」の関係が「我-それ (I-It) 」の関係になってしまう。分離されたことで同時に知性や感性も生まれる。しかし、我々はさらに高次の視点に立ち、もう一度、主客未分「我-汝 (I-Thou) 」の関係を再構築しなければならない。そのためには自らに固執せず、自己の中心を解放し、他者と触れあい、無心無我の相互主観性をつくりあげること、これがイノベーションの源泉になるのである。主観と客観の間にある相互主観の状態になって初めて自分自身を認識することになる。互いに向き合うことで生まれる相互主観性が一番重要であり、その相互主観性を生み出すのが「場」なのだ。

リーダーを育てるための六要素

イノベーションとは、このSECIモデルのスパ

イラル化であり、創造性と効率化を両立させ、高速回転し続けることだが、そのためにはイノベーションのプロセスを導くリーダーが必要になる。そのリーダー像には六つの要素がある。一つ目は世のため人のため善い目的をつくること、次が現実を直観すること、三番目は場をつくること、四番目はその本質をコンセプトや物語にすること、そしてそれらのコンセプトや物語を何がなんでもやりぬくことが五番目にあげられ、六番目に、そうしたリーダーシップを自律分散型で育てて、全員がリーダーである、ということ認識させること、これら六つがリーダーの条件である。

では、そのリーダーをどのようにして育てていくのか。それは（現場、現物、現実という）仕事の型をつくっていくことだ。組織的に創造的な型にすることで、一人ひとりがプロとして育っていく。最後には無意識でも体が先に動く、という状態にまで錬磨させていく。これは知的機動力の基盤となる。同時に教養も重要になってくる。実践面では職人道、徒弟制が必要になる。新しい徒弟制というものは複数のよき指導者＝メンター（Mentor）をもつことである。しかし、本気になって向き合わなければ組織の型というものを形成することは難しい。これらはマニュアル化できないものである。

経営の本質をハイブリッド化

知的機動力とは共通善に向かって、変化する環境の中で俊敏かつタイムリーに暗黙知スパイラルを持続させる能力を養っていくことである。しかし、これは日本企業のDNAとして既に存在するものだ。ジェイムズ・アベグレンという著名なコンサルタントは、日本的経営の三種の神器として終身雇用、年功序列、企業内組合の三つを掲げ、その本質をまとめた。彼は、

年功序列について実は「ライフタイム・エンプロイメント＝終身雇用」ではなく「ライフタイム・コミットメント＝終身的貢献」と述べていた。これは全然意味が違う。アベグレンは海兵隊員であったが、日本的特質として彼がまとめた特徴は、海兵隊組織にも共通している。年功序列という点では、海兵隊という組織にも特進はなく、階級に応じて経験の質をマスターした能力や身体能力が重視され、昇進していく。企業内組合という点についていえば、海兵隊に階級はあるが全員一体という組織だ。日本軍を倒すため徹底的に研究し、その上をいったのだろう。こうしたことを考えると、日本的経営の本質とグローバルな経営の本質をハイブリッド化し、心身一体の知的機動力のある組織をつくっていかねばならないのである。

一番コストを要するものは正当化能力だ。自分の理想を実現化するために莫大な時間や労力を費やすことになるかどうかは、組織に知的機動力があるかにかかっている。トップダウン、ボトムアップといった知の流れをオープンにし、既成概念を崩壊させ、リスクを積極的にとり、全員の知を結集し、知識創造にコミットさせる機動的な会社経営こそが、知的正当化コストを最小化にし、知的資産を最大にすることができるのである。

もう一度、原点に立ち返り、本質を追求することが重要なのである。いわば知的体育会系的な人材を育成することが肝要であるということだ。

講師略歴

のなか いくじろう
野中 郁次郎 氏
(1935年、東京都生まれ)

早稲田大学政治経済学部卒業。富士電機製造株式会社勤務の後、カリフォルニア大学経営大学院バークレー校でPh.D（経営学博士）を取得。防衛大学校教授、一橋大学大学院国際企業戦略研究科教授などを経て現職。カリフォルニア大学経営大学院バークレー校ゼロックス知識学名誉ファカルティースカラー、早稲田大学特命教授を併任。2016年1月より日本学士院会員。初の日本発の経営理論として知識創造理論を確立し、世界に広めたナレッジ・マネジメントの権威として海外での講演も多数。

2002年紫綬褒章を受章。同年、米国の経営学会で一番権威のあるアカデミー・オブ・マネジメント・フェローグループに、2008年、ウォールストリートジャーナル「The most influential business thinkers 最も影響力のあるビジネス思索家トップ20」で、それぞれアジアから唯一選出された。2010年秋、瑞宝中綬章を受章。そのほか2013年11月に最も影響のある経営思想家50人を選ぶThinkers50のLifetime Achievement Award（生涯業績賞、功労賞）を受賞するなど、多くの賞に輝く。専門：経営戦略論、知識創造理論。

【主要著書・論文等】
『全員経営』（2015、日本経済新聞出版社、共著）、『国家経営の本質』（2014、日本経済新聞出版社、共編著）、『史上最大の決断』（2014、ダイヤモンド社、共著）、『アメリカ海兵隊－非営利組織の自己革新』（1995、中公新書）、『失敗の本質』（1984、ダイヤモンド社、共著）、他多数。

委員会報告

産業競争力強化委員会 「イノベーションが不可欠」
DMM.make.AKIBAを視察

産業競争力強化委員会は10月18日、新しいものづくりを支援する「DMM.make.AKIBA」（東京・秋葉原）を視察した。長谷川登委員長（副代表幹事）をはじめ、起業支援、ものづくり両委員会委員も含め、10人が参加し、施設内容や仲間とアイデアを出し合ったり実際に試作したりしながらイノベーションに取り組む若者らの活動を見て回った。委員らは、都心のターミナル駅前に起業家支援の施設から、実用化に結び付くものづくりがいくつも芽生えている状況に、「こうした取り組みが仙台でも不可欠」と、認識を新たにしていた。



「DMM.make.AKIBA」を視察する産業競争力強化委員会の委員ら

「DMM.make.AKIBA」は、2014年11月に開設された24時間利用可能な会員制の施設。東京都の創業・新事業創出支援施策の認定事業施設にも指定されている。

委員らは2グループに分かれ、ハードウェア開発に利用できる最新機材をそろえた10階の「Studio」、シェアオフィスやイベントスペースに利用できる12階の「Base」を、担当者の説明を受けながらそれぞれ見学した。

特に「Studio」には、手軽な製品試作のほか、紫外線により樹脂が硬化する専門性の高い機種など2種類の3Dプリンターや、旋盤、レーザーカッ

ターなど、約5億円を投じた設備が並ぶ。委員らは担当者の説明を聞きながらも「まったく機器に触ったことがなくても利用できるのか」「専門家のフォローはあるのか」など、興味深く質問をしていた。

カフェを併設した「Base」では、個室を含め夜通し打ち合わせや製品試作にやってくる会員が多いという。担当者は「予約制でプロに聞ける相談会も開かれる。約50社の外部企業の協力も得て、品質検査や事業計画、設計、開発、知的財産権など起業に関わることをトータルでサポートできるのが特色」と話していた。

9月幹事会・全国セミナー準備委員会報告

日 時：平成28年9月14日（水）
15：00～16：30

場 所：仙台サンプラザホテル
出席者：24名

◇ 審議事項

- （1）仙台経済同友会としてのインバウンド誘客促進提言の発表について
 - 事務局から、これまでの活動のとりまとめとして
 - ・中長期的観点での観光戦略提言
 - インバウンド4000万人時代の計画的な受け皿整備
 - 東京オリンピックに焦点を当てた中期観光戦略
 - ・プロモーション手法の検討
 - インターネット媒体・ビックデータの活用等
 - ・観光資源の発掘と磨き上げ（人材含む）について提案があったが、東北ブロック広域観光分科会に続き情報交換会が活動を開始しようとしていることから、仙台単独の提言活動ではなく、東北ブロックの7同友会連携の中でインバウンドを捉えていくことがより重要

であるとの意見があり、提言発表は見送った。

- （2）札仙広福・四極円卓会議の概要とテーマ選定について

12月15日に福岡で実施される四極円卓会議のテーマとして(a)政府機関・本社機能の地方移転(b)外国人観光客4000万人時代の受け皿整備が候補に挙げられ、各同友会毎のテーマ選定希望を出すことになるが、仙台としては（a）案の外国人観光客の受け皿整備を希望することとした。

◇ 報告事項

- （1）第30回全国セミナーについて
 - ・印刷業者選定について
 - 会員企業3社から見積を頂き、提出いただいた資料等を吟味した結果、募集パンフレット、プログラム、参加者名簿及び記録集作成を今野印刷(株)にお願いすることに決した。
 - ・今後の準備業務推進要領について
 - 各業務区分の業務予定及び担当部一覧が報告された。来年4月本番に向けた業務の推進予定が明らかになった。

10月幹事会・全国セミナー準備委員会報告

日 時：平成28年10月14日（金）
16：30～18：00

場 所：仙台勝山館
出席者：19名

◇ 審議事項

- （1）全国セミナーについて
 - ・第3回企画委員会企画案について
 - 10月6日に開催された全国セミナー企

画委員会の結果報告を受け、全体企画を承知するとともに、仙台が担当する第1分科会「大震災の教訓 ～防災・減災施策の向上策～」の論点、パネリストについて代表幹事及び企画委員で詰めを行っていくことを決定した。

- ・懇親会等担当業者案について
 - 当会会員企業で仙台国際センター登録業者となっている7企業での役割分担

- を審議、以下のように決定した。

歓迎会食・分科会打合せ会食（1社）

仙台サンプラザホテル

懇親パーティー（3社）

仙台勝山館

仙台ロイヤルパークホテル

ホテルメトロポリタン仙台

2日目昼食（弁当 3社）

江陽グランドホテル

仙台国際ホテル

一乃庵

（2）平成28年度海外ミッション大綱について

事務局からインバウンド誘客促進を

テーマとするミッション派遣案の提示を

受け審議の結果、下記大綱に沿ってミッ

ションを派遣することに決した。
- 期間 平成29年2月19日（日）

～23日（木）

派遣先 上海及び台湾

募集人数 30名

（3）特別幹事会の開催日程等について

29年度通常総会における役員交替に関

する代表幹事諮問、特別幹事会からの答

申等の日程概要等について承認した。

11月 平成29年度役員改選に関する代

表幹事諮問

12月 第1回特別幹事会

1月 第2回特別幹事会

2月 平成29年度役員改選に関する特

別幹事会答申

会員異動（敬称略）

- ◇ 交替（1名）
- 東北電力株式会社 執行役員宮城支店長
- （新）大森 聡氏
- （旧）戸田靖久氏
- 【現在会員 293人】

仙台経済同友会 9・10月活動日誌

月 日（曜）	会 合 等
9月7日（水）	復興庁復興推進委員会福島県視察（事務局長（代理）、福島県沿岸部地域）
8日（木）	第40回東北ブロック会議 13：00～20：30（当会参加者36名、秋田市）
14日（水）	幹事会・全国セミナー準備委員会 15：00～16：30（24名）
	例会 16：30～18：00
	「構造たんぱく質による素材革命」
	講師：Spiber株式会社 取締役兼代表執行役 関山秀和氏（102名）
16日（金）	交流会 18：00～19：00（仙台サンプラザホテル）
	全国経済同友会事務局長会議 15：00～20：30（事務局長 和歌山市）
28日（水）	全国セミナー資料収集 13：00～15：00（事務局長 岡山経済同友会）
	財務事務次官来仙対応 16：40～17：00（大山代表幹事 アイリスオーヤマ(株)五橋本社）
	駐仙台大韓民国総領事館主催レセプション 17：00～19：00（大山・一力両代表幹事他、国際ホテル）
10月4日（火）	（公社）経済同友会 イノベーション・エコシステム委員会との懇談（大山代表幹事、リーダーシップ・プログラム参加メンバー ウェスティホテル）
6日（木）	全国セミナー企画委員会 12：00～14：00（佐藤・横山企画委員 事務局 東京）
14日（金）	幹事会・全国セミナー準備委員会 15：00～16：30（19名）
	例会 16：30～18：00
	「知的機動力を錬磨する～暗黙知・場・実践知～」
	講師：一橋大学名誉教授 野中郁次郎氏（90名）
18日（火）	交流会 18：00～19：00（仙台勝山館）
	産業競争力強化委員会 DMM.make.AKIBA 視察 15：30～19：00（18名 東京）
19日（水）	復興庁震災復興委員会岩手県視察（事務局長（代理）、岩手県沿岸部）

今後の予定

月 日（曜）	例会・幹事会・全国・東北ブロック等
12 月 5 日（月）	全国経済同友会代表幹事円卓会議 14：00～19：30 (オークラアクトシティホテル浜松)
14 日（水）	富山市まちづくり現地視察 富山市長との昼食会 12：45～13：45 まちづくり視察 14：00～15：30 (まちづくり・中枢都市形成委員会)
15 日（木）	札幌・仙台・四極円卓会議 15：00～19：40 テーマ 「政府関係機関・本社機能の地方移転」 基調講演 (15：10～16：10) 講師：内閣官房まち・ひと・しごと創生本部 事務局次長 奈良俊哉氏 各地同友会報告・意見交換 (16：20～18：00) 懇親会 (18：10～19：40) (ホテルニューオータニ博多)
21 日（水）	幹事会・全国セミナー準備委員会 15：00～16：30 例会・交流会 16：30～18：00 「U・J・I ターン人材の獲得について（仮題）」 講師：リクルートワークス研究所 城倉 亮氏 交流会 18：00～19：00 (ホテルメトロポリタン仙台)
1 月 19 日（木）	幹事会・全国セミナー準備委員会 17：00～18：00 新年会 18：30～20：30 (ホテル佐勘)
2 月 19 日（日） ～ 23 日（木）	海外視察 (上海、台北・台南)
28 日（火）	幹事会 15：00～16：30 例会 16：30～18：00 「臓器の 3D モデル化がもたらす医療技術の飛躍的進化（仮題）」 講師：(株)クロスエフェクト 代表取締役 竹田正俊氏 交流会 18：00～19：00

発行所 仙台経済同友会
〒980-0014 仙台市青葉区本町二丁目16番12号
仙台商工会議所会館 7 階
電 話 (022) 223-8555
F A X (022) 262-2650
E-mail:sendaikd@nifty.com
発行人 大 山 健太郎
一 力 雅 彦
編集人 金 田 隆